

怪談の魅力について

光原百合

1. 怪談の人気

近年、怪談というジャンルが注目を浴びていると感じることが増えていきます。日本における怪談研究の第一人者である東雅夫氏は、その著書『なぜ怪談は百年ごとに流行るのか』（学研新書、二〇一一年）において、怪談をテーマにしたイベントが盛んであること、関連書籍も多く出版されていること、京極夏彦、恩田陸、宮部みゆきといった人気作家たちが近年、こぞって怪談系の作品を書いていることなどをあげて、「まさに世は怪談全盛時代」（同書八ページ）と指摘しています。

筆者（光原）もこのジャンルには興味を持っているので、今年度の第七回文学談話会では「尾道で怪

談を書く」というタイトルのもと、怪談創作の面白さについて語ろうと考えました。あいにくというべきか、怪談の魅力を語るだけでも時間が足りないほどで、創作に関してあまり語れなかったことが残念ですが、怪談というジャンルの魅力については、ご参加の皆様にご共有していただけたのではないかと思います。

そのようなわけで本稿では、当日お話しした「怪談の魅力」についてまとめておくことといたします。

2. 怪談とは何か

「怪談の魅力」について語るには、まず「怪談」とはどのようなものを指すのか確認が必要です。大まかに言ってしまうえば「怪異を描いた話」というこ

とになります、それについて興味深い指摘を耳にしました。

二〇一四年は、日本における怪談文芸に大きな足跡を残した小泉八雲（ラフカディオ・ハーン）の没後百十周年にあたり、八雲の業績を顕彰するイベント開催や書籍出版が相次ぎました。その中のひとつ、八雲曾孫である民俗学者・小泉凡氏の著書『怪談四代記 八雲のいたずら』（講談社、二〇一四年）の中に、次のような一節があります。

2013（平成25）年夏に、はじめて『新耳袋』の著者・木原浩勝さんにお会いした。ぜひ一緒に松江で「怪談談義」をしましょうと自ら提案してこられたのだ。結局、その年の7月25日に松江歴史館で「松江怪談談義」が実現した。（中略）その談義の中で木原さんはこんなことを提案された。

境港は「妖怪のふるさと」、出雲は「神話のふるさと」と表明し、人々に認知されていますよ。そのちょうど中間にある松江は、小泉八雲によってその靈性が世界に知られています。だ

から松江を「怪談のふるさと、聖地」にしませんか！

実に説得力と魅力に溢れたわくわくする発言だった。会場からちよつとしたどよめきと拍手が沸き起こった。個人の熱い思いをぶつけられただけでなく、それは客観的に見ても自然なことだと皆が感じたのだろう。（同書二一八ページ）

実は筆者もこの「怪談談義」に参加しており、期せずして起こった「どよめきと拍手」にも加わりという貴重な経験をしたのですが、この「談義」の中で、木原氏がおおむね次の意味のことを述べていたことを覚えていきます。

〈怖くなければ怪談ではないが、怖いだけでは怪談とは呼べない〉

大いに興味深い言葉ですが、前半の、「怖い話」ということが怪談の必要条件かどうかといえ、多少意見は分かれると思います。「ジェントル・ゴースト・ストーリー」と呼ばれるような、超自然の存在が登場する点で怪談に分類されるけれどあまり怖

くない作品もあるからです。

そこで前半は保留にしておいて、ここで注目していただきたいのは後半です。〈怖いだけでは怪談とは呼べない〉、それでは怖いだけではない、怪談を怪談たらしめる要素、怪談のアイデンティティとは何なのでしょう？

「怪談談義」の際、木原氏はこのことについてはっきりした回答は述べませんでした。それぞれの「怪談観」に任せられる部分なのかもしれません。筆者自身は怪談を、怖いと同時に一種の「哀惜の念」を覚えさせる物語と考えています。怪談の多くに、亡き人の霊やもう失われたもの、失われつつあるものが登場するからでしょうか。

東雅夫氏は、前出の『なぜ怪談は百年ごとに流行るのか』において次のように語っています。

日本最初の怪談実話集としての側面を有する
仏教説話集『日本霊異記』にせよ、近世における
怪談文芸の最初の成果と目される仮名草子

『伽婢子』にせよ、その著者が僧侶であったこと
とは決して偶然ではないし、近代において語り
としての怪談の担い手となる噺家や講釈師の

ルーツもまた、近世仏教の説教僧に求めることができる。

要するに、われわれ日本人は、怪異や天変地異を筆録し、語り演じ舞い、あるいは読者や観客の立場で享受するという行為によって、非業の死者たちの物語を畏怖の念とともに共有し、それらをあまねく世に広めることで慰霊や鎮魂の手向けとなすという営為を、営々と続けてきたのであった。(中略)

仏教における回向えうこうの考え方と同様に、死者を忘れないこと、覚えていること——これこそが、怪談が死者に手向ける慰霊と鎮魂の営為であるということの要諦なのだろう。(同書一七八—一七九ページ)

「死者を忘れない」「覚えている」ための慰霊と鎮魂の文学が怪談であるとする東氏の考えは、筆者の感じる「哀惜の念」とも一脈通じるのではないでしょうか。

大災害などで多くの人命が失われたのち、「亡くなったはずの誰それと会った、見かけた」という怪談実話めいた噂が生まれるのは昔からよくあったこ

とだそうですが、これは昔の話だけではありません。東日本大震災後、被災地で故人と再会したという人が相次ぎ、二〇一三年にはそれらの話を巡るドキュメンタリー番組『亡き人との「再会」〜被災地三度目の夏に〜』がNHKで放映されて大きな反響を呼びました。これだけ科学が進歩した現代においても、亡き人を悼む気持ちたちが怪談として結実することが確認された事実には、肅然とせざるを得ません。

3. 怪談の文学的意義

佐藤春夫は「文学の極意は怪談である」と語ったと言われています。もともと佐藤春夫がこの言葉をどこに書き遺しているかは確認できず、佐藤春夫が三島由紀夫に語ったらしい言葉を、三島が記録しているのみという（東雅夫『文学の極意は怪談である——文豪怪談の世界』（筑摩書房、二〇一二年）より）、怪談を巡るエピソードにふさわしい曖昧さをまとめた言葉です。

そのため佐藤がこの言葉に込めた真意は判然としないのですが、怪談というものが文学の中でも重要な位置を占め、かつ優れた作品を書くのが困難である、といった意味を表すのだろうということは推定

できます。

実作者の間でよく聞くのですが、たとえば「読者を泣かせる」というのは、書き手にとつては比較的容易なわざだということですが、それに対して、「読者を怖がらせる」のはなかなか困難だとか。

筆者が考えるに、読者を単純に怖がらせる手段として文章は、たとえば映像のインパクトにはなかなか及びません。ショットキングな映像を見せられれば、多くの人は瞬間的にぎくりとし、それが心に刻みつけられてしまいます。瞬間的なインパクトではどうしても劣る「言葉」を用いて読者を怖がらせるにはどうすればいいか。文学者にとつては挑戦しがいのあるテーマなのではないでしょうか。怪談をその業績の中心としていた小泉八雲、泉鏡花たちはもちろん、一般には怪談の書き手とは位置づけられない文豪の多くが、その業績の中に優れた怪談を残しています。もともと著名な例としては夏目漱石の「夢十夜」があげられるでしょう。

4. 怪談と地域文化

怪談と地域文化の関わりも、最近しばしば指摘されています。

先に紹介した『怪談四代記』引用部分に続けて小泉凡氏は、「これからは無形で未評価の地域文化をしつかりと再評価し、地域資源として活性化に生かしていく時代だし、世界へも容易に発信できる時代だ」と記して、「怪談Ⅱ地域文化」というとらえ方を明らかにしています。

もともと怪談は、地域に根差して長く語り伝えられたものも多く、その点「民話」と共通して、地域文化と深く関わると考えていいでしょう。

また近年の興味深い現象として、各地で「ふるさと怪談トークライブ」という、地域に伝わる怪談をトークイベントで取り上げる試みがなされていることが挙げられます。これが広まるにおいては、二〇一一年の東日本大震災が大きなきっかけの一つになったそうです。それ以前から、怪談文芸を通じた東北の地域文化振興をめざし、東雅夫氏らを発起人とした「みちのく怪談プロジェクト」という運動が展開していましたが、東日本大震災後にこのプロジェクトを支援するため、「ふるさと怪談トークライブ」というチャリティイベントが開催されるようになりました。それを応援・呼応する形で全国様々な地域でも、その地域の怪談を地域活性化のた

めに生かす取り組みが行われるようになったのと（詳しくはふるさと怪談トークライブ公式サイト <http://nurusatokwaidan.web.fc2.com> 参照）。

これは第二項で述べた、怪談の（失われつつあるものを忘れないため）という役割が機能している例だと思われず。未曾有の大災害によって消失の危機に瀕した東北の地域文化、それよりは緩やかではあります。近代化・グローバル化の流れの中で失われつつある各地の地域文化を守るため、怪談が見直されているでしょう。

5. 戦争と怪談

やはり第二項で紹介した、怪談とは「慰霊と鎮魂の営為である」ということに関連して、日本近現代文学研究者の谷口基氏が、『怪談異譚 怨念の近代』（水声社、二〇〇九年）において興味深い論考を行っています。

一九五五年、三重県津市において中学校女子生徒二十六人が水泳訓練中に溺死するという事件が起こり、生還した女子生徒の証言から、これが戦死者のたたりであるという噂が立ちました。証言によると、防空頭巾をかぶった女たちが生徒たちの足をつかん

で水中に引き込んだというのです。そしてその海岸には、戦時中に、米軍の焼打ちによって亡くなった市民の遺体が埋められていたということでした。

戦死者の霊が、戦争責任などあるわけもない中学生たちを祟り殺すとは、谷口氏も同書の中で語っています。いささか「理不尽」に思えます。敵であった米軍なり、戦争当時の為政者なりに祟るなら納得できますが（幽霊が恨みのある相手にピンポイントで祟るのであれば、世の中の悪事はかなり減るような気がするのですが、そういうわけかそうはいきませんね）。それについて谷口氏は、「戦争犠牲者の霊が空襲をしかけた敵国人ではなく、同国人の少女たちを襲ったというこの「理不尽さ」こそが、同怪談を忘れたいものとしている最大の原因であることは否定できないのである」（『怪談異譚 怨念の近代』二二二ページ）と述べています。

「防空頭巾の集団亡霊」は、（中略）当時の少年少女の間では非常に有名な怪談であった。筆者自身もリアルタイムでこのエピソードを読み、小学校の同級生と一緒に震え上がったことを鮮明に記憶している。何がそんなに怖かった

のかと問われれば、戦死者の霊が生者をあの世に連れ去ろうとするその（意志）、その度はずれた怒りの大きさが怖かったのだ。小学生にとつては、そこまで激しく、理不尽な怒りを生み出したものは戦争なんだ、ということまでしかわからなかったが、それだけで十分であった。「防空頭巾の亡霊」によって惹起された恐怖感情は、（だから戦争は起こしてはいけないんだ）という教訓に直結し、心に長く残った。（同書二二二—二二三ページ）

谷口氏は筆者と同年（一九六四年）の生まれであり、実は筆者も、リアルタイムでこの話を読んだ記憶があります。（理不尽だからこそ心に残っている）というのも実感としてわかります。谷口氏はさらにこう続けます。

長じた現在となつては、霊たちの攻撃目標が戦後の日本人であったことに、いくつかの理由を求めることができる。たとえば、敗戦とともに昨日までの帝国主義をあっさり捨て去り、自分たちこそ国家と軍隊に騙されていた最大の

被害者であると主張するような国民性への怒り。あるいは、戦争に負けたはずなのに、かつてなかったほどの繁栄と幸福につつまれた生活を享受している戦後世代への怒り。日本人の精神をめぐる戦中と戦後の非連続性を念頭におくならば、敗戦後十年目に浮上した戦死者たちの怒りを、「理不尽」の一言で切り捨ててしまうことはとてもできないのである。

しかし、最初に味わった恐怖感なくしては、こうした仮説をたてられる年齢になるまで「防空頭巾の集団亡霊」を記憶し続けることはできなかったはずだ。繰り返し言おう。死者たちの怨念に同調し、それを自らのものとする行為は、恐怖によってこそ導かれるのである。(同書二二三ページ)

戦争による死に対しては、「慰霊と鎮魂」の想いに「怒り」も加わります。怪談は「怒り」をも含めて後世の人々に死者の想い、死者への想いを伝えるという、大きな役割を担うことができるのでしょうか。

6. 終わりに

二〇一四年度第七回尾道文学談話会は以上のように怪談の魅力について語り、残りわずかとなった時間で、尾道大学卒業生と筆者自身が書いた短い怪談を一篇ずつ紹介して終了しました。怪談とは実に魅力的なテーマであることを、談話会準備を通じて改めて感じたので、またの機会に是非取り上げたいと思います。

—みつはら・ゆり 日本文学科教授—